

## モンタージュされた美女：「長恨歌」楊貴妃論

静永，健  
九州大学大学院人文科学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/7337159>

---

出版情報：中国文学論集. 53, pp.47-57, 2024-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



# モニタージュされた美女

——「長恨歌」楊貴妃論

静 永 健

「長恨歌」に詠われた楊貴妃の容姿は、いったいどの程度まで、史実としての彼女を描いているのだろうか。

正史『旧唐書』『新唐書』に拠れば、彼女は天宝十五載（七五六）六月に享年「三十八」で没した<sup>①</sup>。よってその生年は、遡って開元七年（七一九）となり、また、その貴妃冊立の天宝四載（七四五）、彼女はすでに数え二十七歳だったという計算になる。

しかし、「長恨歌」第3句における「楊家の女<sup>むすめ</sup>」は、「初めて長成」つまりいまだ十代前半のうら若き乙女として登場する。もちろん、玄宗との初対面は貴妃冊立よりも前になる筈なので、現在の私たちはこの詩句をほとんど何の違和感もなく認めているのである。

その乙女は、白くみずみずしい肌つやをしていた。

春寒くして浴を賜ふ 華清の池

温泉 水滑らかに 凝脂を洗ふ

（「長恨歌」第9・10句）

ここに使われる「凝脂」の語は、もとより彼女の美しさを表現するものであることには違いないが、また中国古典詩の特性として、古代の文章に典拠をもつ言葉であることも、従来多くの注釈書の指摘する通りである。

モニタージュされた美女

碩人其頤 碩き人は 其れ頤なり（背丈がスラリと高い）

衣錦褻衣 錦を衣て 褻を衣りたり

齊侯之子 齊侯の子（おじようさま）にして

衛侯之妻 衛侯の妻となられ

東宮之妹 （齊の）東宮の妹にして

邢侯之姨 邢侯（の夫人）の姨（ご姉妹）

譚公維私 譚公も維れ私（ご親族）にあらせらる

手如柔荑 手は柔らかき荑の如く（ちいさくて）

膚如凝脂 膚は凝れる脂の如く（つややか）

領如蝤蛸 領は蝤蛸の如く（まっしろでふくよか）

齒如瓠犀 齒は瓠犀の如く（きちんと生え揃っている）

螓首蛾眉 螓の首 蛾の眉

巧笑倩兮 巧笑すれば 倩たり（かわいらしく）

美目盼兮 美しき目は 盼たり（ぱっちり）と

（『詩経』衛風・碩人、その第一章と第二章）

この古代詩歌は春秋時代の衛の莊公に嫁いだ莊姜を歌ったものとされ、その記述は『春秋左氏伝』隠公三年（紀元前七二〇）の条にも見える。かと言って、筆者は史実の楊貴妃がこのような白い肌ではなかった、と主張したいのではない。白居易は彼女の美しさを伝えるため、中国の伝統的な作詩技法に従い、古代の美女についての表現を借りて、我々にその情景を再現して見せてくれているのである。なお『詩経・碩人』詩が間違はなく白居易の脳裏に想起されていたことは、この「凝脂」のほか、美人の眉毛を意味する「蛾眉」という語も見えるからである。

宛転たる蛾眉 馬前に死す (「長恨歌」第48句)

椒房の阿監 青蛾老いたり (「長恨歌」第66句)

もちろん後者(第66句)は楊貴妃当人を指してはいないが……。しかしこのように見てくると、

眸を回らせて一笑すれば 百媚生ず (「長恨歌」第7句)

も『詩経・碩人』詩の「巧笑倩たり、美目盼たり」につながる表現となるであろう。すなわち、「長恨歌」の一つの読み方として、このように作者白居易が意識していた過去の文学作品との語彙や表現面での関係性を読み解いてゆくことも、我々は決しておろそかにしてはいけない作業のように思われるのである。

こうした考えの下、筆者は白居易「長恨歌」についての、まことに貴重な注釈書にめぐりあった。明代末期の唐詩選集の一つ唐汝詢『唐詩解』五十巻である(うち白居易「長恨歌」は巻二十「歌行長篇・下」に収録)。

この唐汝詢(一五六五〜一六五九)は、明末の上海近郊に生まれ、五歳で両眼を失明するという過酷な運命を背負ったが、その抜群の記憶力を活かしてさまざまな古典籍を暗誦し、約一五〇〇首の唐詩について、その解釈や重要な語彙の出典・用例を「口述」した人物であり、それを家族や門人たちが書き取ったものが、かく言う『唐詩解』という書物である。一民間人であるため、その出版には、物理的そして経済的に相当な苦勞があったもののようである。しかしその書物は、同時期の他の唐詩選集とは大きく異なり、各詩句に詳細な注釈が施されている。そしてこの白居易「長恨歌」については、合計二二四条におよぶ注釈があり、地名や官職名、また陳鴻「長恨歌伝」や『太平広記』『碧雞漫志』等に収められた逸事を紹介するほか、各詩句の特徴的な語彙についての出典や白居易以前の用例などを懇切丁寧に挙げているのである(しかもその全てを唐汝詢は諳んじていたのである)。盲目である彼は、自分が理解し得た唐詩を、まさしく一字一句レベルに及ぶまで説きあかし、それを周囲の人々に言語化して伝える必

要があった。もちろん中には唐汝詢本人の記憶違いや、傍らにいる筆写者の誤認、また当時の唐汝詢たちが「読む（＝読み聞かせる）」ことが出来た明代のテキストの問題などもあり、その全条の注釈をそのまま鵜呑みにすることはできないが、白居易「長恨歌」についての現在最も詳しい注釈であることは間違いない。中でも詩語の出典・用例の列挙に関しては、『詩経』をはじめとする十三経を起点に、年代の下限は盛唐の李白にまで及んでいる。例えば『詩経』に次ぐ詩語の用例として、『楚辞』の諸篇より次の二条が挙がる<sup>(8)</sup>。

外承歡之洵約兮

諶荏弱而難持

外は 歡を承けて 之れ洵約たるも  
まこと じんじやく、  
諶に荏弱にして持し難し

〔『楚辞』九章・哀郢、第49・50句〕

質銷鑠而洵約兮

神要眇以淫放

質は銷鑠して洵約たり  
こころ ようびよう  
神は要眇として以て 淫 に放たれたり  
ほしいま

〔『楚辞』遠遊、第87・88句〕

\*（洪興祖補注）洵約、柔弱貌。

これによって「長恨歌」第17句「歡を承け宴に侍して閑暇無し」という場面が、漢唐の時代よりも更に古めかしい春秋戦国時代の楚の王宮をほうふつとさせるものであることがわかる。また後者は「長恨歌」第86句「其の中に綽約として仙子多し」の出典。同じ「洵約」の語は先の『楚辞・哀郢』にも見えたが、改めて『楚辞・遠遊』を挙げるのは、前者哀郢の用例が地上界の王宮で楚王を取り巻く奸臣たちの媚びへつらうさまを指すため、後者遠遊のそれは、仙界に到達し身も心もすっかり変化した、ふわふわしたようすを形容する。漢字表記は異なるが、やはり「長恨歌」を読み解く上で重要な典拠と言えよう。<sup>(9)</sup> なお後者遠遊の「要眇」の語も、「長恨歌」第84句「山は虚無縹緲の間に在り」の「縹緲」（うつすら・ぼんやり）につながる語彙として考えてよいであろう。<sup>(10)</sup>

他にも興味深い指摘がたくさんある。漢代の故事や出典には「傾国」（『漢書・外戚伝』＝李夫人）や「金步揺」（『西京雜記』巻一＝趙飛燕）などすでに自明なものが多いが、ここではさらに従来の注釈では稀見の一条を抽出し

てみよう。

司馬相如、初與卓文君還成都、居貧愁懣。…（中略）…文君姣好、眉色如望遠山、臉際常若芙蓉、肌膚柔滑如脂。

司馬相如、初め卓文君と成都に還りしとき、貧に居りて愁懣す。…文君姣好<sup>みめよ</sup>し、眉色は遠山を望むが如く、臉際は常に芙蓉の若く、肌膚の柔滑なること脂の如し。  
（『西京雜記』卷二）

「長恨歌」第59句「芙蓉は面の如く、柳は眉の如し」についての指摘である。芙蓉<sup>はす</sup>の花のようなふくよかな頬は、もとより卓文君に限らず他にも幾人かの古代美女たちの身体特徴として挙げられるであろうが、一読者の目線での自由な発言を許されるならば、この卓文君<sup>（1）</sup>あたりが時代的にも、また文学作品上の知名度においても、注釈としてちょうど程好い位置にあるように思われる。

下って三国時代、詩文においてははいよいよ三曹や建安七子などの用例が登場するが、ここでも従来の注釈書にあまり取り上げられぬものを挙げる。

周宣、字孔和、樂安人也。…（中略）…文帝問宣曰、「吾夢殿屋兩瓦墮地、化爲雙鴛鴦。此何謂也。」宣對曰、「後宮當有暴死者。」帝曰、「吾詐卿耳。」宣對曰、「夫夢者意耳。苟以形言、便占吉凶。」言未畢、而黃門令奏宮人相殺。

周宣、字は孔和、樂安（いまの山東省北東部）の人なり。…文帝宣に問ひて曰く、「吾が夢に殿屋の兩瓦地に墮ち、化して雙鴛鴦と爲る。此れ何の謂ぞや」と。宣對<sup>こた</sup>へて曰く、「後宮に當に暴死する者有るべし」と。帝曰く、「吾卿<sup>あな</sup>を詐<sup>あやむ</sup>きしのみ」と。宣對<sup>こた</sup>へて曰く、「夫れ夢なる者は意<sup>おも</sup>なるのみ。苟くも以て言に形<sup>あは</sup>さば、便ち吉凶を占はん」と。言の未だ畢らざるに、黃門令宮人の相殺すを奏せり。

（『三國志』卷二十九、魏書・方技・周宣伝）

「長恨歌」第71句「鴛鴦の瓦冷ややかに霜華重し」についての唐汝詢注は、魏文帝曹丕に仕えた方術士の逸話を引く。世に夫婦和合の象徴物とされる鴛鴦<sup>おしどり</sup>ではあるが、それが「瓦」として文学作品に用いられると、たちまち宮女の頓死（つまりここでは楊貴妃の縊死）を悼む表現に変化するのである。これについては唐汝詢の周囲でも何らかの議論が起ったのかもしれない。彼はこの『三国志』の引用に続けて、梁の昭明太子蕭統の詩句「日麗鴛鴦瓦、風度蜘蛛屋／日は鴛鴦の瓦に麗しく、風は蜘蛛<sup>くも</sup>（蜘蛛）の屋を度る」と、『鄴中記』の「鄴城銅雀臺皆鴛鴦瓦／鄴城の銅雀台はみな鴛鴦の瓦」との二条を挙げる。これらの説明によって、玄宗が楊貴妃を追慕するようすが、さらに前代の帝王たちの故事と重なり合って、ますます切実に感じ取れるのである。

六朝時代の出典の中では、宋の鮑令暉（鮑照の妹）の次の連作詩が興味深い。唐汝詢は詩題を挙げるのみであったが、ここでは本文（二首連作の全て）を掲げておきたい。

代葛沙門妻郭小玉詩二首

明月何皎皎 垂幃照羅茵  
若共相思夜 如同憂怨晨  
芳華豈矜貌 霜露不憐人  
君非青雲逝 飄迹事咸秦  
妾持一生淚 經秋復度春

葛沙門の妻なる郭小玉に代はる詩 二首

鮑令暉

明月 何ぞ皎皎たる 垂れし幃 羅の茵までもを照らせり  
相思の夜を共にせしときの若く 憂怨の晨を共にむかへしときの如し  
芳華は豈に貌を矜れまんや 霜露も人を憐れまず  
君は（僧侶なので）青雲たかく逝くに非ざるに 飄迹 咸秦を事とす  
妾は一生ぶんの涙を持つて 秋を経て 復た春を度る

君子將遙役 遣我雙題錦  
臨當欲去時 復留相思枕  
題用常著心 枕以憶同寢  
行行日已遠 轉覺思彌甚

君子まさに遥かに役めかんとして 我に双題の錦（の反物）を遺る  
いざ去らんと欲する時に臨当り 復た相思の枕を留む  
題は用て常に心に著け（肌身離さず） 枕は以て同寢を憶ふ  
行き行きて日に已に遠く 転た覚ゆ 思ひの弥よ甚だしきを

（『玉台新詠』卷四）

「長恨歌」第90句「転じて小玉をして双成に報ぜしむ」つまり蓬莱宮に「漢家天子の使い」として訪れた道士を取り次いだ仙女の名前の一つに、この『玉台新詠』所収詩の主人公がなぞらえられているというのである。<sup>⑬</sup>しかしこのことは、単に登場人物の名前の出処のみに留まるものではなく、さらに詩歌の内容にも踏み込んだ考察が可能である。鮑令暉の詠う郭小玉は、自分を見棄てて旅立った良人（葛沙門）を今も激しく慕い続けるけなげな女性として描かれている。そして、彼女の寝台には良人が残っていた「相思枕」があるのだが、これは「長恨歌」第72句の異本「旧き枕故き衾誰とともにか」<sup>⑭</sup>にも、その男女の配役が逆転したかたちで描かれている。このように「長恨歌」には、古代から作者の同時代にいたるまでのさまざまな文学作品との関連性を探りながら、さらに味わい深く読んでゆける愉しみがいまだ豊富に備わっているのである。

さてここで、ふと思ひ出されるのは、白居易が「長恨歌」を詠ずるに至った当時のいきさつである。

元和元年冬十二月、太原白樂天、自校書郎尉於藍屋、鴻與瑯邪王質夫家於是邑。暇日相攜遊仙遊寺、語及此事、相與感歎。質夫舉酒於樂天前曰、「夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時消没、不聞於世。樂天深於詩、多於情者也、試爲歌之如何。」樂天因爲長恨歌。意者不但感其事、亦欲懲尤物。窒亂階、垂於將來也。

元和元年（八〇六）冬十二月、太原の白樂天、校書郎より藍屋<sup>ちやうちつ</sup>に尉たり、（陳）鴻と瑯邪の王質夫とは是の邑に家す。暇日、相携へて仙遊寺に遊び、語らふに此の事（玄宗楊貴妃の悲恋物語）に及び、相与に感歎せり。質夫 酒を樂天の前に挙げて曰く、「それ希代の事は、出世の才に遇ひて之を潤色するに非ざれば、則ち時と与に消没して、世に聞こえざらん。樂天は詩に深く、情に多き者なり、試みに爲に之を歌ふては如何か」と。樂天 因りて長恨歌を爲る。意は、但だ其の事に感ずるのみならず、亦た尤物に懲り、乱階<sup>らんかい</sup>を窒<sup>ふさ</sup>ぎ、将来に垂れんと欲するなり。

（『白氏文集』卷十二、陳鴻「長恨歌伝」）

すなわち仙遊寺での酒宴において、白居易は王質夫の指名によって「長恨歌」を創作する。なぜ彼に白羽の矢が立ったのか。それはもちろん皇帝の特別試験「才識兼茂明於体用科」に及第し、ここ藍屋県の尉として赴任してき

た彼が、一座の中でも取り分けキラキラと輝く存在であつたからであり、かつ、かねて詩人としても近時頭角を現わしつつあつたが故に相違ない。しかし、この「長恨歌」全一二〇句・八四〇言は、発表されるやいなや、陳鴻の「伝」を付録として、瞬時にして他者の追隨を許さぬ存在となり、今日にいたるまで、中国文学史において玄宗楊貴妃故事の中心にあり続けた。それはまさに王質夫の予言通り彼の「出世の才」の然らした所以であるが、ではその「出世の才」とは何なのかと言え、彼の頭脳に蓄積された膨大な中国古典の知識量と、それによつて培われた英邁な思考力にあると言えるのではないだろうか。

近代の映画や写真集などに用いられる言葉にモンタージュ (montage 仏) という芸術用語がある。複数の異なる映像や図像を組み合わせて、一つの場面を効果的に演出してゆく編集技法である。「長恨歌」に詠われた楊貴妃は、その五十年前に世を去つた史実の美女と、それにまつわる巷間の伝承とを、ただ忠実に書き留めただけのものではなく、中国の歴史上に存在したさまざまな王女や美人たちの故事をつなぎ合わせ、その表現や、それにまつわるさまざまな教訓や鑑戒<sup>⑦</sup>を一つに集約した作品だ、と考えてよいのではなからうか。その故事は春秋時代の衛の莊姜から数えてもすでに一千五百年を超える。このいわゆる配合の妙こそが「長恨歌」の魅力であり、楊貴妃の美貌の源泉なのである。

# 注

(1) 『旧唐書』卷五十一「后妃上・楊貴妃伝」には馬嵬坡での賜死の場面に「時に年三十八」と記され、『新唐書』卷七十六「后妃上・楊貴妃伝」も「尸を裹<sup>⑧</sup>むに紫茵を以てし、道側に瘞<sup>⑨</sup>む。年三十八」と記す。

(2) 本稿では「長恨歌」の本文については基本的に通行のものを採り、また日本語訓読のみで示す。日本伝存の旧鈔本を含む諸本の基本情報は、静永「白居易「旧枕故衾誰与共」句の伝播と消滅」(『東方学』第一四七輯、二〇二四年一月)の注(3)(4)(22)を参照。

(3) 楊貴妃が玄宗のもとに初めて召し出された時期については、北宋の樂史「楊太真外伝」に記される「開元」二十八

年十月」の温泉宮（のちに華清宮と改名）行幸とするのが通説である。西暦七四〇年。先の「享年三十八」説に従って計算すると数え二十二歳となる。これに關しては從來、「長恨歌」を詠じるに当たって白居易が故意に年齢を低く設定したのだとの解説が一般的であったように思う。彼女がすでに玄宗の第十八王子である寿王瑁に嫁していて、宦官高力士の計らいで籍を離れ、一時道士となった後に玄宗との面会となった経緯が、白居易の「歌」ではすっかり省かれているからである。しかし陳鴻「長恨歌伝」では、「高力士に詔して外宮を潜捜せしめ、弘農楊玄琰の女を寿邸に得たり」と寿王との關係を秘匿しないものの、その年齢は「既に笄（さかん）せり」とあって、やはり十代前半（十二、三歳頃か）のように説明されているのが筆者にはどうも氣にかかる。もしかすると（あくまでも憶測の域を出ないが）白居易や陳鴻たちの中唐頃には楊貴妃の生まれ年についての確かな情報が伝わっておらず、彼らのイメージしていた楊貴妃は、こんにちの私たちの想像する楊貴妃よりも約十歳若かった可能性がある（つまり馬鬼での死亡時は二十八歳前後）。

（４）周知の通り、この二句は『論語』八佾篇にも引用される。

（５）陳禕璇「唐汝詢とその『唐詩解』について」（『中国文学論集』第五〇号、二〇二二年）、静永「明末の異人唐汝詢とその唐詩注釈」（『中国文学報』第九五冊、二〇二二年）、陳禕璇「『唐詩解』の編著と出版について——唐汝詢の交友關係を中心に——」（『中国文学論集』第五二号、二〇二三年）、陳禕璇「明代『唐詩解』における白居易評価」（『中国文学会報』第三一号、二〇二四年）等を参照。

（６）万曆四十三年（一六一五）序刊『唐詩解』五十卷（九州大学附属図書館所蔵）による。ただし例えば「漢書」本文とそれに続く顔師古注のような場合は併せて「一条」として数えた。またこの二二四条のうちに、駱賓王「帝京篇」の注を見よとする注が二条、長恨歌本文中の割注として音注が一条（第57句）、本文異同の注が一条（第72句）含まれる。ところで現在『唐詩解』には活字排印本が市販されている。王振漢点校『唐詩解』（上下二冊、河北大学出版社、二〇〇一年）。しかし該書は原刻本注釈のほとんどを削除してしまっており、唐汝詢の真意を伝えていない。「長恨歌」の場合（上冊四三〇～四三二頁）、翻刻された注釈は僅か三十八条に留まる。是非とも原刻本の図版画像（上述の九州大学附属図書館と国立公文書館内閣文庫のそれぞれのホームページで検索可能）を参照されたい。

- (7) 唐汝詢は「侍兒扶起<sub>レ</sub>起こすに嬌として力無し」(「長恨歌」第11句)について、李白の「西施醉舞嬌無力／西施の醉舞嬌として力無し」(「口号、吳王美人の半醉」詩第3句)を引く。ただし、これだけに留まらず唐汝詢は隋煬帝の詩「歩緩知無力、臉慢動餘嬌／歩緩くして力無きを知り、臉慢ろにして余嬌を動す」(「喜春遊歌二首・其二」第1・2句)をも同時に引いている。「嬌無力」という詩語が成立する沿革を示そうとしたものと言えよう。

- (8) 唐汝詢長恨歌注全二一四条のうち、「楚辞」からは全部で八条の挙例がある。残る六条はここでは論述を割愛するが、全注釈の解説については、別途機会を見つけて公表したい。

- (9) 現在一般的な長恨歌注では、漢字表記の近しい「莊子」逍遙遊篇の「藐<sub>び</sub>たる姑射<sub>の</sub>山に神人の居する有り、肌膚は冰雪の若く、渾約として処子の若し」を出典に挙げる。しかし本来、古典詩の典拠は一つに限定されるべきものではなく、幾つかの作品の先行例が折り重なってイメージが形成される場合もあり得るだろう。この場面(楊太真が昇仙した蓬萊宮)について、唐汝詢は「楚辞」「莊子」双方を注として挙げる。

- (10) 唐汝詢注はさらに「縹緲」の先行例として隋の虞世基(？～六一八、世南の兄)の「長安秋」詩の第5・6句「上林蒲桃合縹緲、甘泉奇樹上葱青／上林の蒲桃はまさに縹緲たり、甘泉の奇樹は上に葱青たり」を挙げる。

- (11) また第59句の下三字「柳は眉の如し」について唐汝詢注は、北周の庾信「春賦」第15・16句「眉將柳而爭綠、面共桃而競紅／眉は柳をもって緑を争ひ、面は桃とともに紅を競ふ」を挙げる。

- (12) 昭明太子蕭統「講席將畢賦三十韻詩依次用／講席まさに畢らんとし、三十韻の詩を賦す。次に依りて用う」詩の第37・38句。

- (13) 晋の陸翹撰とされる「鄴中記」であるが、明清時代の諸輯本にこの当該句は見えない。恐らく唐汝詢は当該句の内容から判断して『鄴中記』の書名を冠したのであろう。『分門集注杜工部詩』など宋代の杜甫詩注の幾つかを見ると、杜甫「秋日荊南送石首薛明府辭滿告別奉寄薛尚書頌德叙懷斐然之作三十韻」詩の第15・16句「殿瓦鴛鴦坼、宮簾翡翠虛／殿瓦は鴛鴦に坼け、宮簾は翡翠に虚し」の注に当該句が挿入されている(書名は記されない)。この詩句は、まさしく杜甫が実際に目にした天宝十五載(七五六)の玄宗蒙塵後の荒廃した長安王宮のようであり、白居易も参照した可能性がある。「鴛鴦瓦」の出典が、魏文帝の妄言のみならず、父の魏武帝曹操の霊を鎮める銅雀台にもあるなら

ば、この言葉の重厚感がさらに増すことであろう。なお、清の仇兆鰲『杜詩詳注』卷二一の「秋日荊南……」詩の注では、この当該句が堂々と『鄴中記』の書名を付して記されるが、唐汝詢注からの転用と思われる。仇兆鰲が『唐詩解』の注を無批判に引用することについては、静永「明末の異人唐汝詢とその唐詩注釈」（前掲注5）に述べた。

- (14) 「小玉」の出典には別の意見もある。謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年。その第二冊九五四頁）によれば、呉王夫差に小玉という夭折した美貌の少女がいたという。しかもこの伝説については、白居易が自作した「霓裳羽衣歌」第77句に「呉妖小玉飛作煙／呉妖の小玉 飛びて煙となる」とあり、かつ白氏の自注「夫差女小玉、死後形見於王、其母抱之、霏微若煙霧散空。／夫差のむすめ小玉、死して後に形はれて王に見ゆ、其の母之を抱かんとせば、霏微<sup>ぼんやり</sup>として煙霧の若く散じて空ゆ」とある。筆者としてはこのいずれをも典拠として取り、「長恨歌」をより想像力豊かなものとして捉えたい。

- (15) 静永「白居易「旧枕故衾誰与共」句の伝播と消滅」（前掲注2）参照。

- (16) 同時代の文学作品との関係については、すでに李白や杜甫など盛唐詩人の作品との考察が進んでいるが、さらに新たな方向として、下定雅弘『長恨歌・楊貴妃の魅力と魔力』（勉誠出版、二〇一一年）の語釈補注（二五～二九頁）に幾つか示されている唐代伝奇『遊仙窟』などとのつながりも見逃せない。

- (17) 「長恨歌」の主題が愛情の賛美なのか、皇帝への訓戒にあるのか、この議論も尽きないが、筆者は近年の竹村則行「中唐の「尤物」論と「長恨歌」の「恨」（『日本中国学会報』第七〇集、二〇一八年）を参照。

\*本研究はJSPS 科研費 JP20H01339の助成を受けたものです。